内面に働きかける小学校家庭科教育
―意味ある体験的活動を通して―

（平成 27 年 8 月 31 日提出，平成 27 年 10 月 20 日受理）

Home economics education at elementary school that works on the inner feeling of students
―through meaningful experiential activities―

池田市立石橋南小学校
西江　なお子
NISIE Naoko
Ikeda City Ishibashiminami Primary School

キーワード：家庭科教育，体験活動，内面

Abstract：The correlation between meaningful experience activities and improvement in the motivation for learning in home economics education of elementary school was clarified. The examples in the fields of “residence” and “consumer education” were examined by the method where the alteration of consciousness among children before and after the classes was compared. The experience of illuminating a floor with a higher light source and checking the stains on the floor broke their fixed idea of “cleanliness”. Having an experience as the sellers who advertise the dessert after school lunch made them re-examine their own values in choosing goods as consumers. These experience activities broke the idea they had been taking for granted and aroused a problem consciousness in their minds. Also, they were made to actively participate in the problem-solving learning associated with linguistic activities and actual feelings. The educational effects of experience activities that alter the inner sides of children were discussed.

Keywords：home economics education, experience, inner feeling

１．はじめに

（１）児童を取り巻く体験活動の現状

現代の児童の特徴の一つは、疑似体験が顕著に増加しているが、直接体験が減少傾向にあることだ。例えば包丁で果物の皮をむいたり野菜を切ったりした経験のある児童は約 50％という結果[(1)] が報告され、1984 年と比較すると 60％から 10％減少している[(2)]。また、小学校 4 ～ 6 年生の学校以外の公的機関や民間団体が行う自然体験活動への参加率は 2006 年度から 2010 年度にかけて 10％以上低下している[(3)]。加えて学校における体験活動時間数は、中学校・高校においては増加傾向にある一方、小学校では減少傾向にあるのが現状である。2010 年度小学校第 5 学年の学校における体験活動の実施時間数は 30 単位であり、2002 年度と比較すると約 18 単位少ない。こうした直接体験の減少は、児童の「学び」の成立を困難にし、学びの過程である「感覚→思考→実践」の「感覚（体験）」が欠落することにより、知ることの喜びや意欲が失われると文部科学省は警鐘を鳴らしている。併せて疑似体験や間接体験の増加は子どもたちの成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念されている[(4)]。しかし、学校現場では総授業時数の減少にともない、体験的な活動を教育課程に取り入れる余裕が十分に確保できない

という声もよく聞かれる。

（2）体験活動の意義

筆者は、児童が成長する過程において、体験的な活動の有無はその後の生活実態に多大な影響を及ぼすと考える。子どもの頃の体験と大人になってからの意欲・関心等との関係の調査では、体験的な活動が規範意識や人間関係能力、職業意識、文化的作法・教養など生きていくうえで重要な能力や意識の向上に大きく関係しているという結果がでており、これは注目すべき点である[5]。では、体験活動の有無がなぜ成長や発達に大きく影響を及ぼすのであろうか。

梶田(1989) は体験がもたらすものとして次のように述べている。

> 体験はその積み重ねによって少しずつわれわれの感性を変えていきます。「実感」や「本音」の内容は、そうした体験の蓄積によって、知らず知らずのうちに形成されてきたものです。またわれわれが「腹に落ちてわかる」と言う場合、それはわれわれの体験に深く根差した理解になっていることを意味しています。何かを納得するといった場合でも、そこには何かの切実な体験が絡んでいることが多いでしょう。そして体験は一つの「くさび」のようにわれわれの内面世界に突き刺さり、われわれのものの見方、考え方を、その根底から徐々に変容させてしまうこともあるのです。

筆者は、体験活動を通して今までと異なった現実に直面し、それに実感を伴った問題意識を持ち解決を図る過程において発揮される学びが、生きた実践力の育成へとつながると考える。なぜなら、思考や知識を働かせ実践し、よりよい生活を創り出していくためにも体験活動は必要であるからである[6]。しかし、限られた授業時間内でねらいを明確にして、ある程度長期にわたる直接体験を行っている学校は多くない[7]。では、児童に直接体験の機会を十分に与え、子どもの学習意欲を向上させていくにはどのような教育上の手立てが必要なのだろうか。

筆者は、小学校家庭科教育において児童が意味や意義を感じられるような体験活動を積極的に取り入れることにより、児童が自分の実感できる本気の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、そのことにより主体的に生活する力が育成されるという仮説をたてた。その詳細は次章で実践とともに述べることとする。そして自らの家庭科の授業実践を通して、この仮説の検証を試みたい。

2．小学校家庭科教育の現状

まず、小学生の各教科に対する意欲を見てみよう。小学生を対象に好きな教科を調査すると家庭科は7位であった[8]。また、家庭科のどの分野に興味を示しているのかの調査[9] では「食物」「衣服」「お金の使い方」が上位を占めることが明らかとなった。逆に楽しくない分野は「住まい」であり、住まいの中でも特に整理整頓の工夫・掃除の工夫・汚れ調べが上位を占めた。実際に小学校家庭科における住居分野の研究は少なく、小学生が住居分野の何に興味があるのかさえ明らかになっていないのが現状である。だが一方で、住居分野において日常生活に役立っていると児童が感じる学習内容を調査すると整理整頓の工夫・掃除の工夫・風通しが挙げられた[10]。このことから住まいの分野は児童の生活に密着しており役に立つという実感を児童は抱いていることも明らかになった。筆者は児童の興味・関心が低迷している大きな要因の一つは、家庭科授業の在り方だと考える。つまり体験活動を通した興味・関心に根差した授業になっておらず、その結果上記の結果となっていると思われる[11]。

次に、平成20年改訂の家庭科学習指導要領において、教育内容が充実された消費者教育の指導状況についての現状を見ていくこととする。小学校においては、例えば物や金銭の大切さに気付き、計画的な使い方を考えることや、身近な物の選び方、買い方を考え適切に購入できることなどを指導することとしている[12]。しかし、消費者教育を教育委員会の予算で推進しているのは約1割に留まり、協力も含めて関与していない教育委員会が7割も占めている。つまり学習指導要領で重視されている消費者教育の指導充実は、行政の支援もほとんどなく各教員の裁量に委ねられていることになる[13]。

こうした家庭科教育を巡る厳しい状況を踏まえつつ、学習指導要領の目標に掲げられている「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」ことをめざして行った、大阪教育大学附属池田小学校の授業実践を紹介する。

本稿では、体験的な活動を積極的に取り入れるとと

もに、それを通して児童一人ひとりの内面世界に働きかける工夫のある家庭科教育の意味について考察することとする。

３．児童の内面に働きかける家庭科授業

（１）消費者教育の実践

食品の安全が取り沙汰されている昨今、商品の正しい情報を見抜き、安心・安全な商品を選択する能力の育成を図ることは家庭科教育の使命である。しかし、前述したように学習指導要領で重視されている消費者教育の指導は、行政の財政的な支援もほとんどないうえにその指導内容と方法は各教員の裁量に委ねられている。さらに家庭科は非常勤講師や若手の教員が指導している学校が多い。こうした実態を鑑みると、多くの指導時間を使って消費者教育を行うことは困難な現状である。しかし､実感を伴う体験活動を行うことは、児童の意欲を喚起し学びを継続させる要因として重要であると考える。品質表示に注目する意義を体験活動を通して子どもに意味づけし、家庭生活でも実践することにより、主体的な生活者の育成を目的とした題材を以下に示す。

○売り手側の立場にたち消費者の心理に迫り、商品購入時における買い手側の心構えに関心を持つ。
○商品を購入する際は、商品宣伝に加え品質表示も観察して商品の本質を正しく読み取ることが大切であることに気づく。

消費者教育≪全体指導計画≫

児童の活動	指導上の留意点
広告を考え、売り手側の心理に迫る。・・・２時間	
○どのような広告にすれば、自分たちが選んだ商品投票してもらえるかを考える。	○自分たちが選択した商品が給食で取り上げられることに期待を持たせる。 ○児童がどのような視点で広告作りをしているのかを把握する。
商品選択には宣伝に加え品質表示も大切な指標であることに気づくとともに、商品の本質を見て選択しようとする意識を持ち、広告を改定する。　・・・２時間	
○商品広告のもつ働きを知り、自分がどのような視点で商品選択をしていたのかに気付く｡また、よりよい広告作りの工夫を考え､改定をする。	○宣伝広告と品質表示の違いを知らせ、それぞれの意味に気付かせる。
アンケートの集計をとる。・・・１時間	
○文章記述を一読し、他学年が何をよりどころに商品を選択したのか知り、自分たちの作った広告について振り返る。	
品質表示を身近なものとしてとらえる。・・１時間	
○品質表示を調べたり､読み取ったりする。	○児童に様々な品質表示を持ってこさせ、記載内容について話し合いをさせる。 ○品質表示の読み取り方を知らせることで、表示を身近なものに感じさせ、実生活でもそれを見て購入しようとする意識を持たせる。
家族の一員として、自分にできることは何かを考えよう・・・1時間	
○授業で知り得たことが、どのような場面で実際に活用できるのかを話し合う。	○商品選択の際の重要な要素に気づいたうえで、それを家族にどのように伝えるか、どのような場面で使えるかを話し合い、実践に生かせるように支援する。

○品質表示の見方を知り、実生活に生かすことができる。
○消費者の立場で自分が、家族の一員としてできることは何かを考え、実践できる。

1）立場を変えて思考する

①売る側の視点から

消費者の視点を学習するにあたり、まず「売り手」の立場に立つ体験活動をすすめる。「完全な売り手」の立場にはなれないが、より近い場の体験や実感が持てるように給食デザートをグループごとで下級生に提示するポスターを作成し、併せて校内テレビ放送でPRし、最多票を獲得したデザートが給食献立となるという、学習結果が具現化するような臨場感ある場を設定した。この体験を通して売り手が商品を売買する際にどのような視点で売り込むかを思考させた。自分たちが選択したヨーグルトのパッケージに記されている魅力的なキャッチフレーズやイラストなどを、セールスポイントにして記載するグループが目立った。例えば「本製品には8%のイチゴが含まれています。だから、美容と健康に一番良いヨーグルトです。」と、8%という数字から想像した誇大な情報を載せるグループもあった。8%のイチゴ含有率は事実であるが、「その事実＝美容と健康に一番良いヨーグルト」とは言い切れない。しかし児童がそのように表記したのは、自分のグループを優位に立たせ、選択者の心を掴むための手段であろう。また、フルーツヨーグルトのグループは、実際の商品には含有されていない多くの果物のイラストを描き、フルーツが多く含まれるイメージを押し出していた。

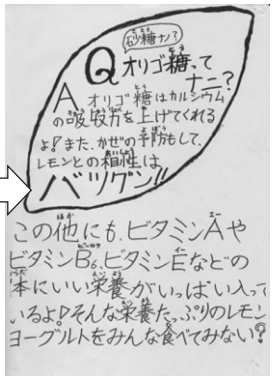
このように売り手の立場の体験を行うと、商品をより観察するようになるとともに、消費者がどこに着目して選択しているのかを客観的に思考できるようになる。さらに自らの商品選択の際の価値観に気付く契機となる。まさに自己の内面意識についての「意識下」から「意識化」への変容への第一歩である。

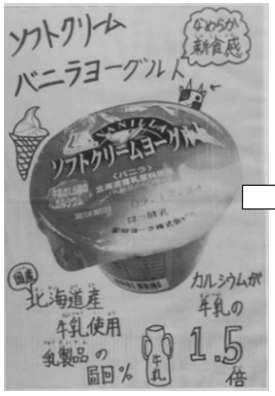
完成したポスターをお互いに観察し、ポスターを描く際に商品の参考とした部分について意見交流をして、自らの商品着目の傾向性に気づかせた。約50%の児童がパッケージのキャッチフレーズに着目し、それを参考にして作成していることが分かった。キャッチフレーズやそこから連想するものを抽出したポスターで商品を紹介することは、自分たちと同様に下級生にも誤解を与える可能性が強いと児童は考えるに至った。この気づきを契機に、再びポスターの作成作業が児童の中で自然発生的に起こった。左側のポスターが最初に作成したもので、右側が改作後のものである。

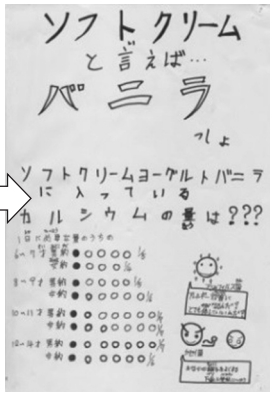
「商品をくわしく、わかりやすく下級生に伝えよう」をモットーに改作した。目に付きやすい外面的な情報では不十分だと分かり、小さな表記である食品表示こそが重要であることに気づき、食品表示の記載内容をグループで調べた。難解な文言は図書館で調べたりインターネットで検索したが、児童は食品表示記載事項についてほとんど理解できないことに衝撃を受けたようだ。その後、家から空き箱を持参し、ヨーグルトの表示内容と見比べるなど、食品表示について主体的に学ぶ姿も見られた。

改訂後のポスターを初めのものと比較すると、一見文字が多く読みにくい面もある。しかし表記内容の一つひとつは、児童が調べたことを低学年向きに分かりやすく表現しており、下級生が選択する際の参考となった。

下級生が投票する際には、給食用のヨーグルトの選択とともに、決定理由（ポスターのどこに着目したか）も記入してもらい集計した。集計結果では、ポスターの栄養面や特徴について説明した文言を参考に選択した下級生が多かった。児童が追記した内容がデザート選択にあたり、低学年に大きな影響を与えたことは明らかである。







②消費者の視点から

本題材終盤で、売り手側から消費者側へ立場を移して商品選択する際の着眼点について意見を交流した。消費者の立場としての児童の意見をいくつか紹介する。

・宣伝広告がいかに商品の良い点に注目してアピールしているかがわかった。
・商品について大きな字、目立つ色で書かれていると、そこだけが目に入り、それがその商品の全部と思ってしまう。もっと、色々なところを見ようと思う。
・食品表示は知っていたけど、今までは何が書いてあるのか全く興味がなかった。でも、ここに書かれていることはとても大切なことだと分かった。これからは、ここをもっと見ようと思う。

最多投票数を得て、給食で実際にそのヨーグルトを食べたグループの感想は以下の通りである。

・思っていた通りの味で、おいしかった。
・予想していた味と違っていた。
・おいしかったけれど、楽しみにしていたソフトクリームの味はしなかった。
・宣伝広告から受ける印象と味が一致しなかった。

児童は売り手の立場から消費者の立場へと視点を移す一連の体験学習を通して、消費者として外装のキャッチフレーズだけで判断するのでなく、食品表示にも着目して購入することが大切であることを実感した。その結果、自分の内面に隠された無意識の商品選択の基準や価値観に気付くこととなった。

（2）実感・納得の清掃活動の実践

清掃活動は家庭教育や就学前教育でも日常的に行われ、児童にとって非常に身近な活動である。しかし、この活動は児童の興味・関心が低く、積極的な取り組みが継続しにくい。本実践は快適な環境を実感させる

清掃活動　≪全体指導計画≫

児童の活動	指導上の留意点
まわりの環境の実態を調査する。・・・２時間	
○高光源の特殊ライトで照射された清掃後の床を観察し、清掃に関心を持つ。 ○まわりの環境の実態を調査し、どこにどのような汚れやごみがあるのかを知る。	○視覚的・数値的に見える化を図り、清掃に関心を持たせる。
清掃計画を立てる。・・・２時間	
○調査結果をもとに、清潔な環境づくりに必要な清掃用具や清掃方法を調べる。 ○必要に応じて清掃用具を制作したり、試清掃をしたりして、次時の清掃活動の具体的計画を立てる。	○清掃方法の工夫が図れるよう、多くの種類の清掃用具や、手作りの道具が制作できるよう多くの種類の用具や素材を用意し、意欲の向上を図る。
自己評価を行い、自分の清掃活動を客観的にとらえる。・・・２時間	
○チェックカードを用いて自己評価し、自分の清掃活動を振り返る。 ○グループでの交流活動を通して清掃方法の工夫、改善を図る。	○自己の清掃活動を振り返らせるとともに、グループ間の交流を図り清掃方法の工夫、改善に意欲を持たせる。
下級生に清掃方法を伝達する。・・・１時間	
○清掃方法を下級生に伝え、正しい清掃方法や清潔な環境がもたらす心地よさなどを共有する。	○掃除方法を下級生に伝え学びが深まるようにする。
家庭でできることを考える。・・・１時間	
○学習内容を振り返り、家庭でできることを考え交流する。	○家庭での実践力が継続するよう、無理なく今の自分にできることを考えさせる。

ことで、児童が納得して清掃活動に取り組むことを目的としている。４つの目標とともに、全体指導計画を示す。

○健康的で気持ちのよい生活をするには、身の回りの清掃をする必要性があることが分かる。

○汚れに応じた清掃の仕方を考え、工夫して実践する。

○清掃用具を正しく使い、材質や汚れに応じたそうじができる。

○清掃に必要な用具やその用具の扱い方、材質や汚れに応じた清掃の仕方がわかる。

１）清掃意識と取り組みの実態把握

６年生児童 106 名の、学校での清掃活動に対する意識と取り組みの意識調査を、図１を用いて授業前と後で実施し授業の効果を測定した。併せて６年生 38 名に家庭における清掃への取り組み調査も実施した、その結果が図２である。

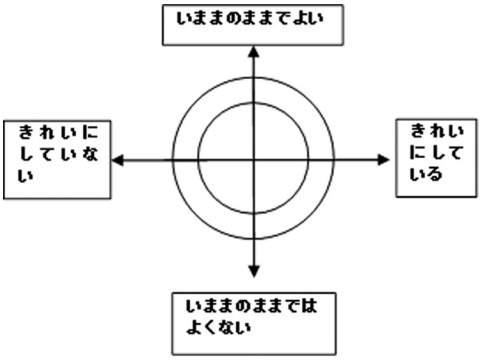


図１

①　家で清掃をすることがある。	37
②　どれくらいのペースで清掃をするか。	
・週に２回以上	6
・週に１回くらい	10
・２週間に１回くらい	5
・月に１回くらい	5
・夏休みなど長い休みの時にするくらい	11
③　家の中のどこを掃除することが多いですか。（複数回答あり）	
・自分の机がある部屋全体	16
・自分の机のまわりのみ	12
・家族共有の部屋	15
・廊下・階段	10
・洗面所	12
・トイレ	8
・風呂	17
・ベランダ・庭	12
・玄関	9
・それ以外	11

図２

この調査結果から、家で清掃する児童は少なくはないが、清掃活動が日常化していない児童が半数以上おり、清掃場所が限られている現状が浮き彫りとなった。

2）体験活動による見える化

児童の清掃後、一見清潔そうに見える床を高光源の特殊ライトで照射し拭いきれていない埃や汚れを目の当たりにさせた。単元導入部分で、見えない汚れを見える化して概念砕きを行い、児童の意識を根底から揺るがす体験を行った。併せて空気中に浮遊するほこりの量を機械で測定し、視覚的･数値的に見える化を図った。

３）言語活動と清掃体験活動

汚れ把握調査の際、機器を用いて比較確認するだけでなく、理想とする清掃後の状態を文章化したチェックカードを児童に作成させ、自己評価させるとともに、汚れの画像を撮影させ、画像と文章を関連させてより良い清掃の方法を考えさせた。児童が清掃の意義を実感できるよう、一定期間いずれも清掃体験活動の前後に確認を行い比較した。その後グループでの交流活動を通して、清掃方法の改善の仕方を考えさせた。児童は清掃用具の使い方や場所に適した用具の作成、汚れに応じた清掃方法などの改善を行うことで、より清掃の成果が見られるという仮説を立て、実践した。この一連の活動を通して、清掃方法を改善して実践し、その過程や結果を文章化して確認するという学習の循環が起こった。

図１を用いた学校での清掃活動に対する意識と取り組みの調査では、106 名中「清掃態度は今のままで良く、なおかつきれいにしている」と改善の必要性を感じない児童が指導前は 91 名いたが、指導後は 14 名に減少した。「真面目に掃除をしているし、きれいになっているから。」と清掃活動は満足と答えていた児童が、学習後は「今までのやり方ではいけないと思った。もっときれいになる方法を知りたい。」と変容した。

（床を高光源の特殊ライトで照射して汚れの確認をする）

（グループ単位で清掃体験活動と汚れ測定をする）

４）体験の伝達で深まる学び

本題材終盤、清掃方法を１年生に伝える活動を行った。適切な清掃の仕方や清潔な環境がもたらす心地よさなどを、自分と同じ体験活動をしていない他の人に分かるように伝えるには、どのような方法や文言を使えば可能なのかと、児童は試行錯誤しつつ全身を使って伝達方法を工夫していた。これは、清掃体験活動での実感を伴った理解と学びをさらに深化させる言語活動である。

また家庭での生活につながるよう、家庭と連携を図り児童の清掃活動の場を確保してもらった。家庭での清掃経験が皆無の児童も、授業での学びを活かし、図２での調査時より清掃場所が多様になったり、清掃の回数が増加したりした。また清掃の仕方を家族に伝えることで褒められることもうれしかったとの報告が寄せられている。

（1 年生に清掃の仕方を伝えている）

４．まとめ

（1）家庭科における体験活動の意義

冒頭で、筆者は直接体験の減少は、児童の「学び」の成立を困難にし、学びの過程である「感覚→思考→実践」の「感覚(体験)」が欠落することにより、知ることの喜びや意欲が失われると記した。文部科学省も、思考や実践の出発点あるいは基盤としてあるいは、思考や知識を働かせ、実践して、よりよい生活を創り出していくためには、体験と活用した学びが必要であると提言している。さらに梶田も体験が楔として心の内面に突き刺さり、われわれを変容させると述べている。このことを鑑みても、本実践による体験的な活動を取り入れた学習内容は、ある一定の成果を得たと思われる。

梶田は「学校で教育活動の一環として狙いとする特別な体験のうち、後々まで影響が残ってほしいもの」について次のように述べている。まず第一にその体験によって日常的な意識の流れに何らかの衝撃がもたらされるものをあげている。そのような体験は後になってからも体験を自分なりに反すうし、意味づけを試み、一つの経験として蓄積できるからだというのである。つまり意識野におけるフローとしての体験を対象化し、整理し、意味づけてストックとしての経験にし、蓄積していくような特別な意味を持つ体験こそ教育の場で取り上げる必要があるというのである。この梶田の提案する特別な意味を持つ経験という角度から、２つの家庭科授業における体験活動を検証することにする。

まず、第１の消費者教育の実践で行った売り手側になって、給食に出すヨーグルトの選択という活動は自分自身にとって他人事ではない体験である。給食という自分の利害にかかわる体験から導入し、仲間との交流を通じて自分自身の消費者としての価値意識の傾向の再検討をせまるもので、内面的な意識改革に関わるものへと発展する、意味ある体験といえる。さらに消費者の立場も経験させ実感を伴った活動に発展していると考える。

第２の清掃活動の実践における、床を高光源の特殊ライトで照射して汚れの確認をするという活動は、児童が従来持っていた既成概念や固定概念に反する事実を突きつけるという心理的違和感を生み出す体験である。日常的になんとなく自分の環境が清潔と思っている固定概念が覆るからである。この体験も児童の日常生活の中で、経験化される体験であると筆者は考える。さらにこの体験を言語化して、他者に伝えるという活動は思考力と表現力を大いに刺激するものである。

学習の方法という観点からこれらの実践を見るといずれも体験活動を通して児童の学習意欲の喚起を図

り、自ら調査・分析したり、新たな課題を見つけそれを解決する方法を模索したりするなど、「感覚→思考→実践」という一連の学習サイクルが形成されている。その結果が実践例で記した「ヨーグルトのポスター改作」や「清掃活動に対する意識と取り組みの調査数値の変動」となって現れている。また、これらの学習活動を通して、後述の課題で示すように学習から2週間後の実態調査では、授業での学びの成果がその後の児童の生活に良い影響を及ぼしていることが明らかとなった。これは、児童が家族の一員としての自覚を持ち、主体的に生活する力を身に着けたといえるのではないか。

2つの実践を梶田の「学校で教育活動の一環として狙いとする特別な体験」の視点で検証してきたが、家庭科の「生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」という教科目標達成には、児童の内面世界に働きかける体験的な活動が不可欠であると筆者は考える。

（2）今後の課題

小学校家庭科の授業時数は、5年生は年間60時間、6年生は55時間である。この限られた時間内で体験活動をいかに取り入れ児童の学びを深化させ、家庭で継続した取り組みへとつないでいくかは容易なことではない。

意味ある体験活動を通して実践的な態度を育成することが、家庭科の目標から鑑みても重要であることは明白である。本実践のように、平成20年に改訂された学習指導要領において、教育内容が充実された「消費者教育」や、小学校家庭科の学習内容のうち楽しくない分野という調査結果となった「住まい」なども体験活動の充実を図りながら指導を進めることで、児童の学習意欲の向上にはつながった。しかし、児童に家族の一員としての自覚をもたせ、活動を継続かつ日常化させることの困難さが課題として浮かび上がった。

清掃活動と消費者教育の学習後、2週間、1か月、2か月経過後の3回に渡り児童に実態調査を行った。「買い物の際に何を基準に商品選択しているか」および「家庭での掃除頻度」などの設問である。

商品選択については、2週間後の時点では食品表示に着目して選択する児童が87.7％であったが、学習から期間が空くにつれ、選択の視点として値段、おいしさ、量などが上位を占めるようになった。2か月後には食品表示を意識する児童は57.5％まで減少した。

清掃活動においては、家庭での清掃頻度は2週間後の時点では週1回程度で家族が集まる部屋やトイレ、自分の部屋など頻繁に行い、かつ家のいくつかの場所の清掃に取り組んでいたが、2か月後には4週間に一度程度で自分の部屋のみが上位であり、71.7％となった。いずれの結果も学習から期間が空くにつれ、学校での学びが実際生活に継続して十分には活かしきれていない結果となった。この実態から、授業での学びはある一定期間は継続して実践されるものの、活動を日常化するにはさらなる指導の工夫が必要であることが明らかとなった。

今後、より児童の実態に応じた学習内容を計画するとともに、児童の固定概念を覆すような体験活動を効果的に単元に位置付けたい。さらに体験を通して学びへの意欲を高め継続させ、その成果を児童の生活の日常的な実践に結び付けたい。そのための意味ある体験活動とは何かを実践的に検証したい。

引用文献

（1）梶田叡一「内面性の人間教育を」1994
金子書房　50頁

【注】

（1）独立行政法人国立青少年振興機構
(2015)「子供の生活力に関する実態調査」報告書〔概要〕～子供に必要な生活スキルとは～

（2）文部科学省(2005、2006)体験活動事例集－体験のススメ－［平成17、18年度 豊かな体験活動推進事業より］＞1. 1. 体験活動の教育的意義

（3）文部科学省(2013)平成25年版　子ども・若者白書(全体版)

（4）注（1）と同じ

（5）注（3）と同じ

（6）独立行政法人国立青少年教育振興機構(2011)「子どもの体験活動の実態に関する調査研究(平成22年度調査)」

（7）注1と同じ

（8）学研教育総合研究所(2013年3月)　小学生白書

（9）島根大学教育学部(2010年12月)　研究紀要教育科学第44巻41頁～48頁

(10)日本家政学会(2000年)　日本家政学会誌　学校教育における住居領域の教育システムの有効性について　速水多佳子、関川千尋　誌第51巻第4号53～66頁

(11)文部科学省(2013)消費者教育の推進の内容に関す

る事項
(12)文部科学省(2008年3月)小学校学習指導要領　第2章各教科第8節家庭
(13)文部科学省(2000)　消費者教育に関する取り組み状況調査